OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『草わかば』から『有明集へ』 : 有明詩における愛をめぐって |
| Author(s) | 山根, 賢吉 |
| Citation | 語文. 1961, 24, p. 43-48 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68553 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

（48頁から）

れてゆく罪ある肉によって蝕せられ（霊の日の蝕）、朽ちてゆく（不安）「霊」である。その苦悩こそは『有明集』を貫ぬく主調である。

以上の素描においては「罪」「愛」「肉」「霊」等のことばにあまり拘泥しすぎたかも知れぬ。しかしそれらの語は有明詩の本質かなりよく物語っているように思われたからである。

その「愛」の中には幼なくして生別した母への思慕がこめられていないとは云えぬ。またその「罪」や「肉」の中に思春期の暗い思い出が秘められていないとも云えぬ[12]。しかし今はその作品に即して「愛」の消長をたどってみたのである。

註1、『定本蒲原有明全詩集』（昭和三十二年刊）の拾遺篇及び矢野峰人氏の『蒲原有明研究　増訂版』（昭和三十四年刊）所収「有明逸詩抄」の中に、この「をとめごころ」が収められているが、それは明らかに誤りである。恐らく「をとめごころ」とほぼ同じ頃に発表された詩が単行本に収められていないので、この一篇も同様に考えられたものであろう。

2、有明の「先駆者としての藤村」（芸林間歩十九号）には、青年時代に『若菜集』のことばを分解し、語法の組合せを仔細に検討したとある。もって『若菜集』への傾到の一端がしのばれるが、「逃げ水」の八・六調は律格の上からも有明の注意をひいたであろう。

3、「静岡の一夜（有明氏談片）―蒲原有明氏訪問記」（蒲原有明研究所収）六〇頁

4、ロセッティの影響については「蒲原有明の詩に及ぼせる西詩の影響」（蒲原有明研究所収）参照

5、「『草わかば』の著者に」（芸林間歩十九号）

6、『続明治文学史　中巻』四六五頁

7、「蒲原有明の詩に及ぼせる西詩の影響」及び『続明治文学史　中巻』第五章第四節

8、『日本詩歌の象徴精神　現代篇』三三五～三三六頁

9、筆者はこの「別離」を名作「茉莉花」につながるものと考える。

10、『続明治文学史　中巻』四七四～四八一頁

11、『日本詩歌の象徴精神　現代篇』三三七～三三八頁

12、河村政敏氏「蒲原有明」（国文学第五巻第七号）参照